

出され、14世紀代の農作物の種類が判明した。また、当時の衣類の主体であったアサも確認された。

SK31・32の性格については、周辺での今後の資料の蓄積を待って、再検討が必要であろう。

B 中世火葬について

越後の中世墳墓は、墳丘を持ち骨臓器を伴う火葬墓が、吉川町河沢塚〔室岡1990〕、小千谷市岡林古墓がある。墳丘を持たないものでは、柏崎市千古塚〔品田1990〕では方形基壇墓、新発田市宝積寺館跡〔田中ほか1990〕では火葬墓、長岡市三貫梨遺跡〔小林ほか1986〕では土葬墓と火葬墓、火葬跡が検出されている。新発田市宝積寺では女性とみられる火葬骨が出土している。また、近年、新潟市浦廻遺跡〔本間2003〕では河川または沼沢湿地と見られるところから、人骨や獣骨、108点に及ぶ卒塔婆や、呪符、柿経が出土している。墳墓ではないが、中世の葬送の様子を知る貴重な資料となっている。

次に本遺跡で検出された火葬跡と火葬跡上に掘られた土坑SK27について検討する。火葬跡は複数の建物が密集する集落の中心から、わずかに12mしか離れていないが、間にSD59とSD23の護岸が施された堀があり、建物群とは区画された場所である。自然流路SX30の西岸である。火葬跡はSX30に向いわずかに傾斜するがほぼ平坦面に焼土があり、その上に薄く南北2.0m、東西1.36mの範囲で不整形に藁灰が広がる。特に土坑や、通風のための溝を掘削している様子は見られない。灰の広がる方向から北枕とみられるが、伸展葬か屈葬かは不明である。12世紀代に浄土信仰を受容したことにより、側臥屈葬=北枕西向合掌の土葬墓が出現し、三貫梨遺跡でも確認されている。火葬時の姿勢についても同様と考えられるが、検出状況からは確認できない。

SK27の近くで藁灰と骨片が厚く集中しているのは、火葬後骨を集め骨蔵器に収納したためであろう。その骨蔵器は上記の例に習えば墳丘を持つ、持たないは別として墳墓に埋葬されたものと考えられる。この場合、骨蔵器を納めたものを墓とすれば、SK27を墓とするのには問題があろう。SK27からは骨片・灰とともに漆器皿が正位の状態で出土している。漆器皿は葬送儀礼等に使用後、埋納した可能性もある。中世墓は寺院と隣接関係にあることが多いが、周溝を持つ建物SB2が集落の寺院に当る場合、隣接して墓域があった可能性もある。または、靈場への納骨という場合も考えられる。呪符や卒塔婆などの木簡もSX30を中心に出土しているが、火葬跡やSK27との関係は、出土状況からは見出せなかった。

中世の阿賀北地域には、いくつかの葬送地や靈場が知られる。岩船郡神林村小岩内の背後にある嶽薬師は、12世紀中葉から「菟牟礼山」と称され、その裾野に広がる荒川の氾濫原は「とりべの」と呼ばれる葬送地であった可能性がある。白河荘の蓮台野も中世の靈場であった。鎌倉時代の奥山荘と荒河保の境界地には出入野があり、付近の村上山（韋馱天山）には墓地があった〔高橋1999〕。奥山荘と加地荘との境にも墓地や靈場などの葬送地があった可能性が考えられる。